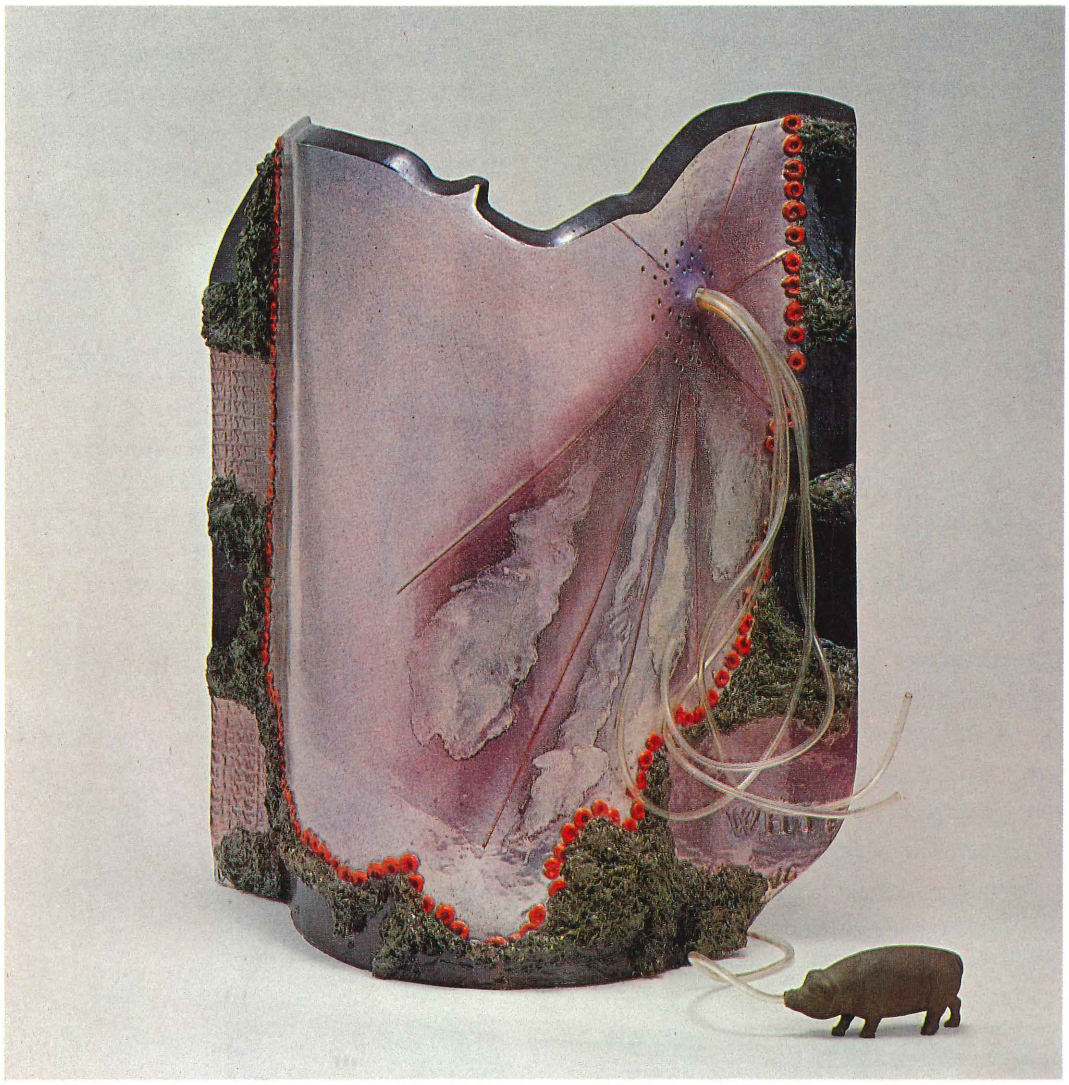
セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.2

編集
発行　1981・12・20
佐賀県立九州陶磁文化館
代表者　田中寿義雄
〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部字田ノ平乙3100－1
電話 09554－3－3681
印刷所　鹿島印刷株式会社
佐賀県鹿島市大字納富分2919－3



オハイオ　'70

京都国立近代美術館蔵

レイモンド・アレン作
アメリカ　1970年
縦52.3cm　横39.5cm

厚さ1.5cm程の陶板をS字状に曲げて成形してある。ビニールチューブをくわえている豚は金属製であるが、ほかは陶製でラスター彩の微妙な色合いが美しい。オハイオ州の形を赤い円文で示し、裏面にはアメリカ合衆国が描かれている。「WHY？」という陰刻文がこの作品をいっそう謎めかしている。

企画展「世界の現代陶芸展」の意味するもの

佐賀県立九州陶磁文化館は、去年の11月1日に開館し、はやくも1周年をむかえた。今年の10月には10万人目の入館者を記録し、この1年間はまずまず順調な活動を続けてきたといえる。今秋その1周年を記念して「世界の現代陶芸展」が開催された。

この展覧会は、世界の現代陶芸の多様性を、九州において初めて大規模に紹介するものである。出品総数は175点で、そのうち外国作品は138、日本が37点で、全体の2割を占めている。出品された作品は、京都国立近代美術館と愛知県陶磁資料館の所蔵品を中心とし、2館の後援に負うところが大きい。

九州圏域においては、外国の陶芸作品に接する機会が東京・京都などに比べ格段に少なく、従って世界の動向への対応が遅れがちなのは否めない。もちろん、単なる追従では意味がないが、今回の展覧会によって九州の陶芸に新たな息吹の生まれることが期待される。

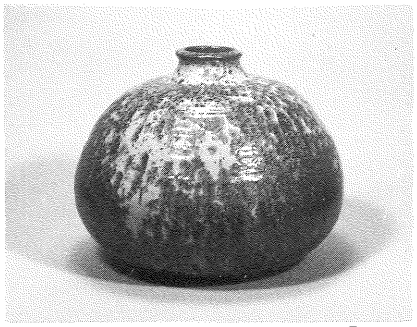
外国文化との交流

九州の陶芸は、開館記念展「九州陶磁展—その展開と継承—」で示されたように、歴史的に豊かな展開をみせながら現代におよんでいる。外国との交流という観点においても、様々な関連性が指摘される。

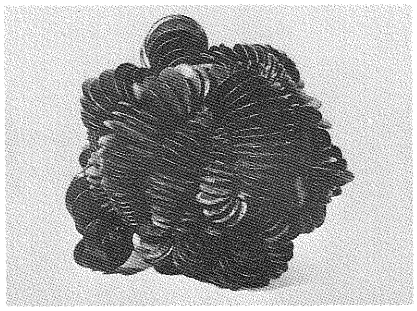
たとえば中世においては、博多を中心として大量の中国陶磁が輸入されているし、また近世初頭の九州陶磁の創成期には、朝鮮の陶技の影響下に、唐津・有田・薩摩・上野・高取の諸窯が生まれている。さらに東インド会社を通じて、肥前の陶磁器が輸出され、近代には西洋の陶磁技術の導入や万国博覧会出品など、多彩な交流の歴史がみられる。しかし時代の趨勢とともに、外国文化の窓口が中央へ移り、かってみられたような積極的な交流や接触は、九州においては希薄となっていった。

日本陶芸の近代化

日本の近代陶芸は、明治時代の万国博覧会への出品意欲を別にすれば、大正時代から昭和時代前期まで海外の動向には比較的無関心であった。中国や朝鮮の古陶磁から刺激をうけることはあっても、骨董趣味を脱却して創造性を推進したのはごく少数の陶芸家に限られていた。しかし明治以降、外国から芸術に関する新しい概念が日本に入り、それを工芸の領域にも定着させ、陶芸を単なる職人的な仕事から芸術の領域まで高めようとする努力が行なわれるようになった。しかしこの場合も、ヨーロッパの作品を手本として模倣した絵画や彫刻とは異なり、陶芸においてはヨーロッパの作品から直接学ぶという面ははるかに少なかった。海外の陶芸の動向に無関心であったのも、技術的にはヨーロッパの作品より日本の方が優れているという自負があったからであろう。戦前までの陶芸における近代化とは、大量生産の領域においては主として西洋の製陶技術の導入を意味するが、個人作家の場合は創造性という概念の受け入れと定着化を必要とし、その試みが従来の技術的な枠組みの中で行なわれた。



1．アーノルド・ツァーナー（スイス）「壺」
Arnold Zahner (SWITZERLAND)



2．ベアーテ・クーン（西ドイツ）「陶彫　渦」
Beate Kuhn (WEST GERMANY)

日本陶芸の敗北

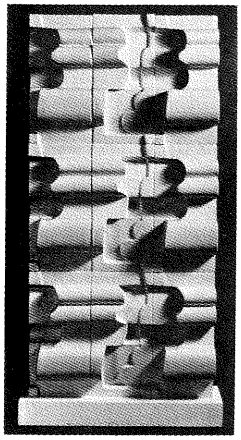
戦後、日本の陶芸界は、外国から特別の刺激をうけることなく復興し、その進展には著しいものがあった。日展を中心として創

作的な陶芸が意欲的に展開されるとともに、伝統的な技法の再認識も深まり、昭和29年には第1回日本伝統工芸展が開かれ、古典技法の再現や伝承に力が入れられた。また昭和30年ごろから生活のなかの工芸が問題とされ、新しい工芸のありかたとしてクラフト運動も始まった。このように多様な展開をみせ質的にも高まった日本の陶芸界に大きな衝撃を与えたのが、昭和39年の「現代国際陶芸展」である。この展覧会は国立近代美術館と朝日新聞社が共催で開いたもので、自由な発想と独創的な表現からなる外国作品は、「日本陶芸の敗北」というような言葉で評され、ジャーナリズムの話題をよんだ。わが国の陶芸は倣古の巧みさや技術的に優秀であっても、真に現代的な陶芸という意味では反省すべき点が多かったのである。

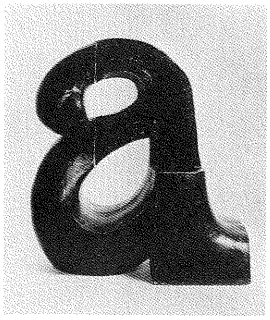
国際交流

その後昭和45年と46年に、京都国立近代美術館主催の「現代の陶芸—ヨーロッパと日本」と「現代の陶芸—アメリカ、カナダ、メキシコと日本」展が開催され、世界の陶芸とわが国の陶芸が同時代的な配慮のもとに紹介された。また昭和48年からは、国際交流の盛りあがりのなかで、「中日国際陶芸展」が始められた。今回の「世界の現代陶芸展」は、上記の3展覧会を機会に購入された作品が中核となっている。

海外の陶芸作品が次々に紹介される一方、わが国の陶芸も外国でひんぱんに展観されるようになった。たとえば昭和47年には、「現代色絵磁器展」がヨーロッパ各地で開かれた。また同年から51年にかけて、「日本陶芸展」出品作からの選抜作品が、国際交流基金により北米、中南米、ニュージーランド、オーストラリアの各地を巡回した。さらに昭和51年には東ドイツで、古陶磁と現代作からなる大規模な日本陶芸展が開かれている。国際化社会のなかで、陶芸における国際交流も、かってないほどの隆盛をみせている。このようななかで、日本の現代陶芸に少なからぬ影響を与えた海外の作品を、九州において初めて体系的に紹介しようとしたのが今回の「世界の現代陶芸展」である。



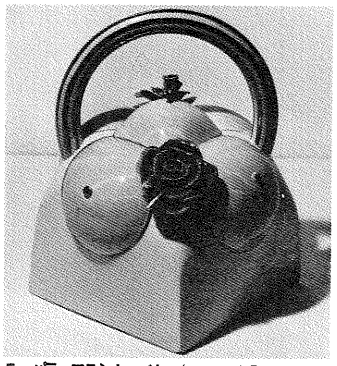
3. ニーノ・カルーソ(イタリア)
Nino Caruso (ITALY)
「陶彫」



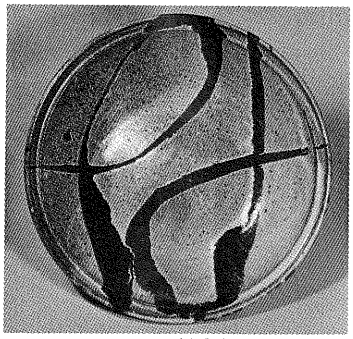
4. ジェイムズ・メルチャート(アメリカ)
James Melchert (U. S. A.)
「7/8のa」

展示の構成

この展覧会の特色を、様式・交流・技法・国別・性別・職歴等の観点から、写真をまじえて簡単に述べてみよう。まず様式についてである。これはあくまで大まかな分類であるが、今日の陶芸は従来の「用」に即した伝統的陶芸と、実用的な機能をはなれた彫刻的もしくはオブジェ的な陶芸と、インダストリアル・デザインの分野に関わる工業的陶芸の3つに大別できよう。具体的な例としてあげれば、写真1・2・3の作品は、それぞれ伝統的陶芸・オブジェ的陶芸・工業的陶芸の傾向を示している。アーノルド・ツァーナーは古い陶



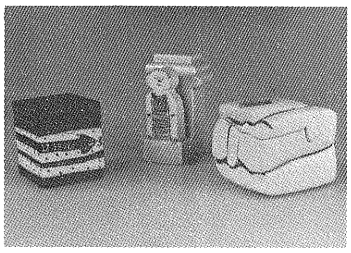
5. パティワラシナ・バウア(アメリカ)「アメリカンビューティ ローズ」
Patti Warashina Bauer (U. S. A.)



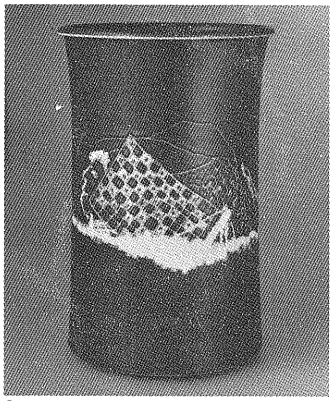
6. 浜田庄司(日本)「海鼠釉墨流描大鉢」
Shoji Hamada (JAPAN)

7. バーナード・リーチ (イギリス)「瓶」
Bernard Leach (GREAT BRITAIN)

8．コリン・ピアソン（イギリス）「鉢」
Colin Pearson (GREAT BRITAIN)

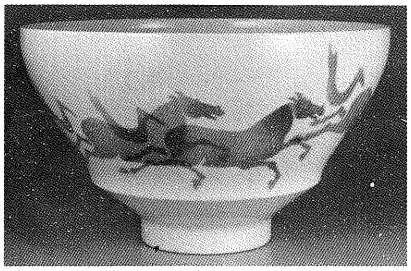


10．ボディル・マンツ（デンマーク）
Bodil Manz (DENMARK)
「刳陶筥（くりとうばこ）と地蔵置物」



9．リヒアルト・マンツ（デンマーク）「黒地白掻落し筒形花瓶」
Lichard Manz (DENMARK)

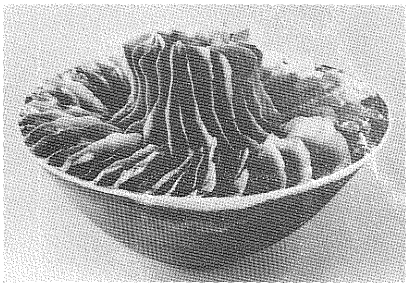
家に生まれ、若い時からロクロの練習を重ね、釉薬や焼成の技術も卓抜している。この作品も白いマット釉の上に青釉が結晶化したもので、技術的なさえを感じさせる。ベアーテ・クーンは西ドイツの女流陶芸家で、独創的な一連の作品を発表している。ニーノ・カルーソは多彩な活動をしているが、彼の建築装飾にみられるような、ユニットを利用した構築的な作品は、明確なデザイン理論に裏付けられている。以上の３つの分野のうち、今度の展覧会では第３番目の工業的陶芸は２、３に過ぎず、ほとんど伝統的陶芸とオブジェ的陶芸およびその中間に位置するものからなる。またヨーロッパは伝統的陶芸作品が多く、アメリカはオブジェ的作品が多いという傾向を考慮して、当館の３つの展示室を、ヨーロッパ・日本・アメリカの順で構成し様式の変化を紹介した。



11．ファンス・フランク（フランス）「染付走馬文鉢」
Fance Frank (FRANCE)

様々な交流

国際交流と一口に言っても、陶芸にあらわれた交流を各作家のレベルで説明することはむずかしい。著名な例として、浜田庄司ら民芸作家とバーナード・リーチとの交流、およびヨーロッパにおけるリーチの影響があげられる（写真６・７・８）。外国の作家が日本で修業したり制作する例は最近では割合多く、今回参考出品の写真９・10と写真11は、昭和50年と55年に有田町の窯元で制作されたものである。原料や焼成は同じでも、作風や技法は異なり、発想の違いが楽しめる。



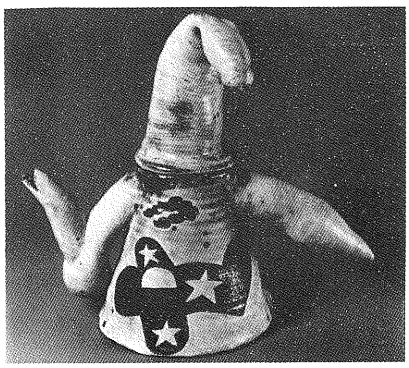
12．ピーター・シンプソン（イギリス）「フォーム」
Peter Simpson (GREAT BRITAIN)

その他の特色

17ヵ国175点の作品を一堂に並べてみると、実に多種多様な技法が使われている。ルーシー・リーの線文掻落し、フリーデル・チェルベールの辰砂、ピーター・シンプソンの枯葉細工のような繊細な技巧（写真12）、パトリック・サイラーの型紙刷毛目（写真13）、はてはチューブや金属まで用いたレイモンド・アレンの作品など多岐にわたっている。

そのほか、出品作家の略歴を通覧すると、外国の作家の場合日本の陶芸家よりはるかに多様な職歴をもつことに気づくのである。また今度の展覧会に女流陶芸家の数が比較的多いことも、わが国との風土的差違を感じさせる。（鈴田由紀夫）

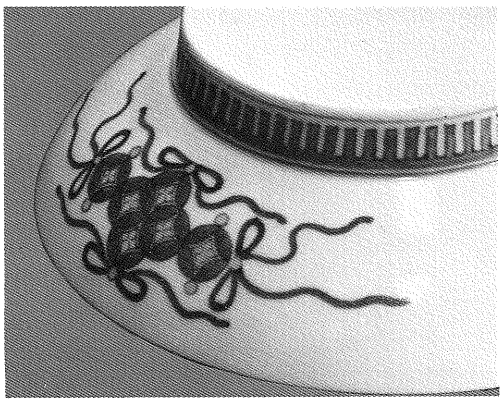
11月10日



13．パトリック・サイラー（アメリカ）「魔法の瓶３」
Patrick Siler (U. S. A.)

シリーズ
やきものに見る文様 (2)
七宝つなぎ文様

両端の尖った長楕円形をつなぎ合わせた文様。中国では「古銭套」(古銭を重ね合わせた文様)、「繡球紋」(獅子が戯れ遊ぶ球) といい宋時代の文様として知られる。日本の古い例では、無意識にであろうが、前期の弥生式土器にヘラ彫りにより4枚の木葉文を十字に描きこれを横に連ねたものがある。11世紀～12世紀の藤原時代には、仏像、仏画に多くみられ、衣の装飾文様として截金で七宝つなぎ文様を施している。



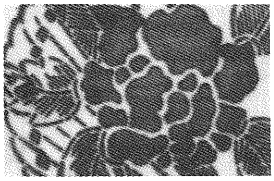
鍋島皿裏文様

仏教では七種の宝物を七宝といい、「無量寿経」には金・銀・瑠璃・玻璃・硨磲・珊瑚・瑪瑙を、「法華経」には玻璃、珊瑚のかわりに真珠、玫瑰をあげているが、これと七宝つなぎ文との関連はわからない。中国明時代の陶磁器には背景地文としてみられ、祥瑞にもよくつかわれる。その影響をうけて、江戸時代には鍋島、古九谷などの装飾文様として用いられている。鍋島の皿の裏側三方には、最も代表的な文様として、七宝つなぎ文様がリボンで結ばれ配置されている。

シリーズ
やきもの小辞典 (2)
印版――型紙絵付け

型紙絵付けの技法は単に摺絵とも呼ばれるし、型紙摺りあるいは型紙捺染法とも呼ばれる。肥前地方では合羽摺りの方が一般的だ。名称は様々だが、いずれも文様を切りぬいた型紙を器面にあて、その上から筆や刷毛で絵具をすりこむ技法をさしている。

(左) 摺絵 扇に牡丹文火鉢



(下) 同上 部分拡大写真

型紙が陶磁器の絵付けに応用された例は、美濃地方では17世紀後半頃の御深井様式の製品が最も早いとされる。この場合絵具は鉄であり、褐色の草花文や小紋が絵付けされている。古唐津においても鉄絵具の型紙絵付け陶片が発見されており、量的には少ないが江戸前期には肥前地区でも陶器に型紙が使用された例を見ることができる。また絵具ではないが、白い化粧土を用いた型紙刷毛目の古唐津製品もあり、技術的系譜を研究する資料として注目される。

型紙が、磁器製品に染付というかたちで使われたのは18世紀以降と思われ、宝永7年 (1710) の箱書きがある古伊万里ものこされている。美濃や肥前で一時的に流行したこの手法は、江戸後期には姿を消した。しかし明治前期に復活し、全国の磁器窯で盛んに用いられた。九州では肥前地区はもとより、天草の高浜窯や薩摩の平佐窯でも用いられている。

型紙絵付けは、複雑な文様でも型紙を一旦彫れば、耐水性のある紙は丈夫なため何回でも使え、その絵付けは簡単で早い。製品は大量生産の日用品がほとんどである。明治時代に大流行した型紙絵付けも、銅板転写の登場によって大正時代には衰退した。

写真の火鉢は口径21.7㎝、高さ20㎝の染付磁器である。絵付は頸部のベタ塗りをのぞくとすべて型紙摺りで、青海波・牡丹に扇文・雷文・蓮弁文の4種の型紙が使われている。これをくりかえして絵付けされるが、雷文と蓮弁文には型の重なりがみられ、これから一つの型紙の大きさがわかる。拡大写真では、型紙絵付けの特色である破線と刷毛のタッチ (花弁の横縞。縦縞は素地の仕上げによるもの) がみられる。　田

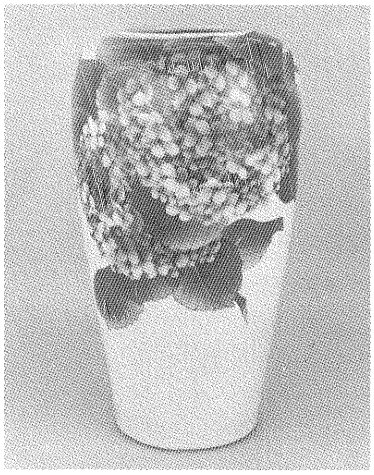
真葛香山（まくずこうざん）作品展 (56．9．1～56．9．25)

宮川香山（初代・本名虎之助）は1842（天保13）年に生れ、京都の真葛原で父長造に陶技を学び、1871（明治4）年開港場横浜に移って開窯、その精密華麗な製品はおおく海外へ輸出された。また内外の博覧会に出品、つねに好評を博し、京都の清風与平（三代、1851～1914）らとともに名工といわれたひとである。

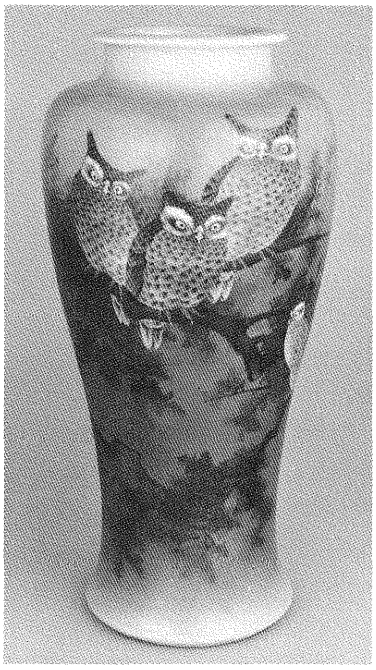
その間、1896（明治29）年には帝室技芸員に推挙された（明治26年の清風与平についで2人目）。

かれは1916（大正5）年、75才で没したが、後継者としてすでに1888（明治21）年家督を相続した二代香山がいた。真葛焼は三代香山が1945（昭和20）年戦災死し、のち弟智之助が一時四代を名乗ったが再興されずに廃窯となった。

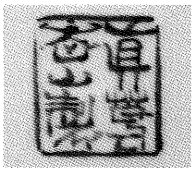
展示された作品は、元来ロンドンより請来されたものを水辺喜一郎氏が有田町に寄贈、今回当館へ寄託になったものである。



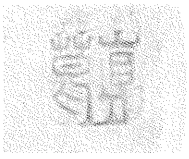
紫陽花絵花瓶



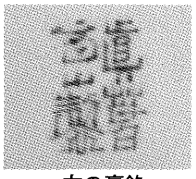
染付木蓮絵花瓶



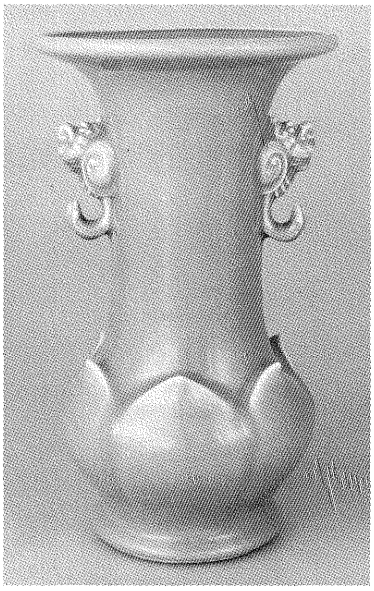
右上の裏銘



右下の裏銘

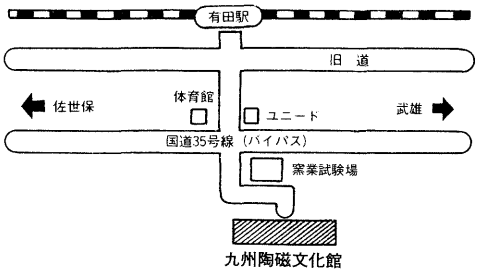


左の裏銘



青磁耳付蓮型花瓶

利用案内



開　館　午前9時～午後4時30分　月曜休館
年末年始休館　12月28日～1月4日

観覧料　一般150円(100円)／大学・高校生100円(70円)／中・小学生50円(30円)／( )内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度別に定めます。

交　通　佐世保線有田駅下車徒歩15分